

令和7年度

信州大学
松本地区

卒業式・
学位記授与式

■開場■

♪ブザー

場内アナウンス／

卒業式
開式

10分前で
ございます。

ロビーに
いらっしゃる
方は、

お席に
おつき
くださいますよう

お願い
いたします。

場内の
皆様に

お願い
申し上げます。

場内では、

携帯電話の
ご利用は

ご遠慮
願います。

携帯電話を
お持ちの
方は、

マナーモードに
設定、

あるいは

電源を
お切り
くださいますよう

お願いいたします。

♪BGM♪

♪ブザー

場内アナウンス／

卒業生、
修了生、
付添者の

着席完了時間と
なりました。

ロビーに
いらっしゃる
方は、

お席に
おつき
くださいますよう

お願いいたします。

卒業式
開式

5分前と
なりました
ので、

注意事項等を
ご説明
いたします。

これより、
場内では

携帯電話の
ご利用は

ご遠慮
願います。

携帯電話を
お持ち
の方は、

マナーモードに
設定、

あるいは

電源を
お切り
くださいますよう

お願いいたします。

卒業式中は、

司会者の
ご案内に
従い、

ご起立
および
ご着席を

お願いいたします。

各学部・
研究科の
代表学生に

卒業証書・
学位記を

授与します
ので、

該当学部の
卒業生・
修了生は

司会者の
ご案内に
従い、

ご起立
および
ご着席を

お願いいたします。

信州大学歌
斉唱では、

入口で
配布
いたしました

式次第の
表紙の
歌詞を
ご覧になり、

3 番まで
ご斉唱
ください。

この
アナウンスの
終了後、

開式まで
の間、

信州大学歌の
CD 演奏を

流します
ので、

歌詞や
メロディーを

お確かめ
ください。

卒業式
閉式後は、

混雑回避の
ため、

1階席と

2階席と

時間を

ずらして

ご退場

いただきます。

司会者が

ご案内

するまで、

お席で

お待ちください。

総合体育館

南側の

駐車場は

12:00に

施錠

いたします。

ご利用の

方は、

12:00までに

お車の

ご移動を

お願いします。

臨時駐車場を
ご利用の
方は、

16:00 までに

お車の
ご移動を
お願いします。

最後に
なりますが、

卒業式
AR 看板の
日付は、

学位記の
日付に
合わせて

3月20日と

なって
おります。

開式まで
3分ほどと
なりますが、

信州大学歌の
CD 演奏を

聴きながら
お待ちください。

♪『信州大学歌』♪

■開式のことば■

♪ブザー

『信濃の国』

♪ ♪

(交響楽団演奏)

司会／

ただいまから、

令和7年度

信州大学
松本地区

卒業式・
学位記
授与式を

挙行
いたします。

私は、

本日
司会を

おおせ
つかりました、

信州大学
医学部
5年

盛田 隆真

(もりた りゅうま)

と申します。

どうぞ
よろしく

お願い
申し上げます。

一同
ご起立
願います。

礼。

ご着席
ください。

■信州大学卒業証書・学位記授与■

司会／

卒業証書・
学位記授与。

人文学部
卒業生

ご起立
願います。

人文学部
卒業生
140名

代表

竹内 あかり

(たけうち あかり)

竹内／

はい。

学長／

卒業証書・
学位記

竹内 あかり
殿

本学

人文学部
人文学科

所定の
課程を
修めて

本学を
卒業した
ことを認め

学士

(文学)
の

学位を
授与する

令和8年
3月20日

信州大学
人文学部長

金井 直

(かない ただし)

信州大学長

中村 宗一郎

(なかむら そういちろう)

おめでとう
ございます。

司会／

礼。

ご着席
ください。

経法学部
卒業生

ご起立
願います。

経法学部
卒業生
180名

代表

降籟 優希

(ふりはた ゆうき)

降籟／

はい。

学長／

卒業証書・
学位記

降籟 優希
殿

本学

経法学部
応用経済

学科

所定の
課程を
修めて

本学を
卒業した
ことを認め

学士
(経済学)
の

学位を
授与する

令和8年
3月20日

信州大学
経法学部長

廣瀬 純夫

(ひろせ すみお)

信州大学長

中村 宗一郎

おめでとう

ございます。

司会／

礼。

ご着席
ください。

理学部
卒業生

ご起立
願います。

理学部
卒業生
180名

代表

瀧脇 光太

(たきわき こうた)

瀧脇／

はい。

学長／

卒業証書・
学位記

瀧脇 光太
殿

本学
理学部
理学科

所定の
課程を
修めて

本学を
卒業した
ことを認め

学士
(理学)
の

学位を
授与する

令和8年
3月20日

信州大学

理学部長

玉木 大

(たまき だい)

信州大学長

中村 宗一郎

おめでとう
ございます。

司会／

礼。

ご着席
ください。

医学部
卒業生

ご起立
願います。

医学部
卒業生

240 名

代表

小山 聖璃花

(こやま せりか)

小山／

はい。

学長／

卒業証書・
学位記

小山 聖璃花
殿

本学

医学部
医学科

所定の
課程を
修めて

本学を
卒業した
ことを認め

学士
(医学)
の

学位を
授与する

令和8年
3月20日

信州大学
医学部長

奥山 隆平

(おくやま りゅうへい)

信州大学長

中村 宗一郎

おめでとう
ございます。

司会／

礼。

ご着席
ください。

■信州大学大学院 学位記授与■

司会／

大学院
学位記
授与。

総合人文
社会科学
研究科

修了生

ご起立
願います。

総合人文
社会科学
研究科

修了生
7名

代表

日高 いづみ

(ひだか いづみ)

日高／

はい。

学長／

学位記

日高 いづみ
殿

本学
大学院

総合人文
社会科学
研究科

総合人文
社会科学
専攻の

修士課程を
修了したので

修士
(文学)
の

学位を
授与する

令和8年
3月20日

信州大学

おめでとう
ございます。

司会／

礼。

ご着席
ください。

総合理工学
研究科

修了生

ご起立
願います。

総合理工学
研究科

修了生

75名

代表

和田 茉美

(わだ まみ)

和田／

はい。

学長／

学位記

和田 茉美
殿

本学
大学院

総合
理工学
研究科

理学専攻の

修士課程を
修了したので

修士
(理学)
の

学位を
授与する

令和8年
3月20日

信州大学

おめでとう
ございます。

司会／

礼。

ご着席
ください。

医学系
研究科

修了生

ご起立
願います。

医学系
研究科

修了生
25名

代表

白井 秀弥

(しらい ひでや)

白井／

はい。

学長／

学位記

白井 秀弥
殿

本学
大学院

医学系
研究科

保健学

専攻の

修士課程を
修了したので

修士
(保健学)
の

学位を
授与する

令和8年
3月20日

信州大学

おめでとう
ございます。

司会／

礼。

ご着席
ください。

総合医理工学
研究科

修了生

ご起立
願います。

総合医理工学
研究科

修了生
38名

代表

杉山 泰啓

(すぎやま やすひろ)

杉山／

はい。

学長／

学位記

杉山 泰啓
殿

本学
大学院

総合
医理工学
研究科

総合
理工学
専攻の

博士課程
において

所定の
単位を
修得し

学位論文の
審査
及び

最終試験に
合格したので

博士
(理学)
の

学位を
授与する

令和8年
3月20日

信州大学

おめでとう
ございます。

司会／

礼。

ご着席
ください。

■学長あいさつ■

司会／

学長あいさつ。

学長／

皆さん、

ご卒業・
修了・
学位取得、

誠に
おめでとう

ございます。

本日
ご臨席を
賜りました

ご来賓の
皆様、

ご家族、
ご友人、

関係者の
皆様と
ともに、

心より
お祝い
申し上げます。

本日
ここに立ち、

皆さん
一人ひとりの

姿を
拝見
しながら、

私は
深い
感慨を

覚えています。

大学で
過ごした
年月は、

決して

平坦では
なかった
はずです。

喜びもあり、

戸惑いも
あった
ことでしょう。

思い通りに
ならない日も

あったに
違い
ありません。

しかし、

その
歩みの
すべてが、

今日
という日に

結実
しています。

そして

皆さんが
入学
した頃、

社会は

新型コロナウイルス・

パンデミック
の只中に
ありました。

講義は

オンラインが
中心
となり、

対面での
議論も、

友人との
語らい
にも

大きな
制約が
ありました。

先の
見えない
状況の
中で、

自分は
何を
学び、

何を
目指せば
よいのか、

迷いを
抱えた
方も

少なく
なかった
ことでしょう。

それでも
皆さんは、

学ぶことを
やめません
でした。

その
事実
こそが、

皆さんの

底力を
物語って
います。

現代
社会は、

いま、

世界的な

大きな
転換期に
あります。

国際
秩序の
前提

そのものが
揺らぎ、

協調
よりも

力の
論理が
優位に
立つ場面が

少なく
ありません。

世界の
各地で、

不寛容が
静かに、

しかし

確実に
広がりがつ
つあります。

意見の
違いが

対話
ではなく
断絶を
生み、

熟慮
よりも
即断が
選ばれ、

合意形成
よりも

力による
強行突破が

目立つよう
になりました。

複雑な
問題を
単純化し、

異なる
立場を
排除
することで

安心を
得ようとする
傾向が

強まって
います。

加えて、

生成 AI の
登場により、

私たちは
いま、

かつて
ないほど

便利な
環境を
手にして
います。

問いを
入力

すれば

即座に
答えが
返り、

膨大な
情報が
整理され、

「それらしい
最適解」に

容易に
接することが
できます。

しかし

その
便利さの
裏側で、

私たちは
いつの間にか

「自ら
考え抜く力」を

手放しつつ
あるのでは

ないで
しょうか。

自ら問いを
深める前に

答えを
求める習慣。

熟考する
前に

結論を急ぐ
姿勢。

効率の追求が、

かけがえのない
思索の時間を

静かに
削りつつ
あります。

不寛容の拡大と、

思考の外部委託。

この二つは
決して

無関係では
ありません。

問い続ける力を
失えば、

他者の立場を

想像する力も

弱まります。

考え抜く時間を

持たなければ、

異なる意見を

受け止める余裕も

失われます。

だからこそ、

いま

求められているのは

「人としての底力」です。

それは、

環境が

整っている

ときだけ

発揮される
能力では

ありません。

不確実な
状況の
中でも、

自ら
問いを立て、

自ら
考え、

自ら
責任を
引き受ける力。

失敗しても
立ち上がる力。

簡単な答えに
飛びつかず、

複雑さに
耐える力。

それが、

これからの
時代に

真に
価値を
持つ力です。

AI は

答えを
提示することが
できます。

しかし、

人間は

意味を
選び取る
存在です。

AI は

最適解を
提示できます。

しかし、

人間は

その結果に
責任を持つ
存在です。

人としての
底力を、

私は、

「カオスを
秩序に
転換する
能力」

と考えています。

混沌の
中でも
立ち止まらず、

対話を
重ね、

より良い
秩序を
紡ぎ出す力。

それは
知識の
量ではなく、

人格と
経験に

裏打ちされた
力です。

大学とは、

その底力を
鍛える
場所に

ほかありません。

信州大学では、

このような
時代に
応え、

新しい
価値を

社会に
生み出していく
人材、

すなわち

「トランスフォーマー」
の育成に

努めて
まいりました。

真の
トランスフォーマー
とは、

Transformative

(社会変革を
実装する力) と

Transformable

(社会の変化に

柔軟に
適応
し続ける力) の

両方を
兼ね備えた
存在です。

そこには、

揺るがぬ
信念と、

しなやかな
柔軟性が

求められます。

環境に

流される存在
であるのか、

それとも

自ら
進化を

選り取る存在
であるのか。

その
分岐点は、

皆さんの

心の
在り方に
あります。

未来は、

待つものでは
ありません。

自ら
切り拓く
ものです。

挑戦し、
失敗し、

それでもなお

立ち上がる
精神力。

Resilience（レジリエンス）。

それこそが、

変化の時代を

生き抜くための
基盤です。

今日の時代、

安全圏に
とどまる
選択も

可能でしょう。

しかし、

本当の
成長は、

安心と
保証の

外側にこそ
あります。

皆さんは
ここで、

混沌の中から

意味を
見いだし、

秩序を
紡ぎ出す力、

すなわち

人としての
底力を

身につけて
きました。

異なる
意見に触れ、

議論を
重ね、

自らの
思考を

鍛え続けて
きました。

その
経験こそが、

不寛容な
時代を

越えていく
力と
なります。

不寛容を
越え、

豊かな
未来を
切り拓く
力とは、

突き詰めれば

「困難に
打ち勝つ力」に

ほかなりません。

Curiosity
(好奇心) は

問いを生み、

問いは
挑戦を
生みます。

Continuous
improvement

(継続的改善) は、

その挑戦を
支えます。

挑戦の
先には

失敗や
挫折が
あるでしょう。

しかし、

その経験を
通じて

獲得した
Resilience
は、

皆さん
固有の、

何物にも
代えがたい

底力と
なります。

人生は

山あり
谷ありです。

しかし、

どの経験も

決して
無駄には
なりません。

転んでも
起き上がる。

迷っても
考え続ける。

挫折しても
志を
手放さない。

それこそが
人間の
尊厳です。

それは、

どれほど
高度な
AIであっても

決して
持ち得ない

力です。

この学び舎を
巣立った
後も、

学び続けて
ください。

学びに
終わり
はありません。

むしろ、

ここからが
本当の
始まりです。

生きている
限り、

学問を
し続けることが
肝要です。

皆さんが

生涯
学び続ける
存在で

あるように、

信州大学は
これからも

挑戦を
続けて
まいります。

信州大学は

J-PEAKS
研究大学
として、

社会変革の
エンジンと
なるべく、

あくなき
挑戦を

重ねて
いきます。

地域から
日本へ、

そして
地球規模の
課題解決へ。

私たちは

その責務を

担い
続けます。

皆さんは、

信州大学の
挑戦の
真只中から

巣立とうと
している
存在です。

信州大学で
学んだことを

誇りに
思ってください。

北アルプスに
降り積もる
雪が、

やがて

水となり、

川となり、

海へと
広がるように、

皆さんの
歩みも
また

社会へと
広がり、

未来を
潤して
いきます。

どうか、

好奇心を
失わないで
ください。

挑戦を
やめないで
ください。

転んでも、
また
立ち上がる。

迷っても、
問い続ける。

そして、

どうか
覚えて
おいて
ください。

Stay curious,

and
keep improving.

皆さんの
健康と
幸福、

そして

限りなく
広がる
未来を

心より
祈念し、

私の
餞（はなむけ）の
言葉と

いたします。

本日は

誠に
おめでとう

ございます。

(拍手)

司会／

卒業生・
修了生

ご起立
願います。

礼。

ご着席
ください。

■卒業生・修了生お礼のことば■

司会／

卒業生・
修了生

お礼のことば。

卒業生・
修了生

ご起立
願います。

卒業生・
修了生代表

人文学部

多田 萌希

(ただ もえき)

多田／

はい。

冷たく
吹き
付ける

風の
中にも、

少しずつ
春の
気配を

感じる
頃と

なりました。

本日は、

私たち
卒業生のために

このような
盛大な式を

挙行して
くださり、

誠に
ありがとう
ございます。

また、
ご臨席
賜りました

ご来賓の
皆様、

学長をはじめ
教職員の
皆様、

関係者の
皆様に、

卒業生
一同、

心より
お礼
申し上げます。

雄大な
山々に
見守られ、

どこか
緊張した
面持ちで

この
会場に
足を運んだ

入学式の日、

私たちは
大学生
としての

新たな
一步を

踏み出し
ました。

慣れない
環境に

戸惑い
ながらも、

それぞれが

自分の
やりたい
ことを

模索し始めた
一年生の春。

学部や
出身も
ばらばらな

同級生との
出会いは、

時に
大きな
驚きを

伴い
ながらも、

自身の
視野を広げる

学びを
与えて
くれました。

そこから
数年。

振り返れば
あつという間で、

それで
いて

深い時間が
流れて
いました。

ゼミで
研究に
打ち込んだ人、

部活や
サークルで

仲間と
絆を
深めた人、

アルバイトに
精を出した人。

ここに
いる
一人一人が

どのような
時間を

過ごして
きたのかは

分かりませんが、

自分なりの
やり方で

日々を
謳歌し、

時に
困難に
向き
合いながら

多くの
ことに

挑んできた
ことでしょう。

しかし、

卒業を
控えた
今、

不思議と
頭に
浮かぶのは、

かけがえのない

誰かと
過ごした

「何てことない」

日常の
数々です。

そうした
日々の

積み重ね
の中で、

自分でも
気づかない
うちに

抱え込んでいた

不安に
向き合い、

一歩ずつ
前に

進んで
きたのかも
しれません。

そして、

これまで
積み上げて
きた

思い出の
裏には、

いつも
多くの人の

存在が
ありました。

時に
それは、

厳しくも
温かく

学問の
道へ

導いて
くださった

大学の
先生方で
あり、

離れた
場所から、

あるいは
すぐそばで

そっと
背中を
押して
くれた

家族でした。

あるいは、

隣で
ともに

卒業の日を
迎えた

大切な
友人かも
しれません。

顔も
知らない

誰かの
存在に、

知らぬ間に
助けられて

いたことも
あった
でしょう。

私たちが
ここまで

無事に
大学生活を

送ることが

できたのは、

数えきれない
ほどの
誰かが

そばに
いてくれた
からです。

そうした
多くの
支えを
糧に、

静かに
紡いできた

日々
だからこそ、

振り返った
とき、

これほど
までに
愛しく、

そして
温かい
ものとして

感じられる
のだと
思います。

あの日、

それぞれ
異なる道を
通って

この大学へ
集った

私たちは、

今日を
境に、

再び
それぞれの

新たな
道へと

歩みを
進めていきます。

変動する
社会の中で、

この先、

私たちの

想像しえない
困難が
いくつも

待ち受けている
かもしれません。

自分が
信じて
選んだ道

であるはずなのに、

目の前が
ぼやけ、

進むべき
方向が

分からなくなる
ことも

あるでしょう。

しかし、

どのような時でも、

きっと
その場にいるのは

一人だけでは
ありません。

すぐそばで、

あるいは
見えないところで、

私たちを
支えてくれている

人がいるはずで。

だからこそ、

正体の
分からない
不安を

恐れてばかり
ではなく、

時には
前向きに

挑戦する
心を

持ち続けたい
と思います。

そして同じように、

私たちもまた、

静かに
誰かを

そっと

支えられる
人で

ありたい
と思います。

最後に
なりますが、

私たちの
母校である

信州大学の

今後
ますますの
ご発展を

心より

お祈り
申し上げます。

そして、

ここに
至るまで
私たちを

支えて
くださった

すべての
方々に、

卒業生
一同
を代表して

深く
感謝の意
を表し、

お礼の
言葉と

させていただきます。

令和8年
3月21日

松本地区
卒業生
代表

人文学部
人文学科

多田 萌希

(拍手)

司会／

礼。

ご着席
ください。

■ 斉唱 ■

司会／

ここで、

『信州大学歌』
の

斉唱を
行います。

会場の
皆さまは、

お配りした
式次第の
表紙の

歌詞を
ご覧ください。

交響楽団、

混声合唱団、

グリークラブと
一緒に

斉唱と
なりますので、

準備が
整うまで

しばらく
お待ちください。

♪ (チューニング)

司会／

指揮者は、

教育学部4年の

小林 寛弥

(こばやし ひろや) さん

です。

一同

ご起立
願います。

交響楽団の
前奏に
続いて、

混声合唱団、

グリークラブと
一緒に

1 番から
3 番まで

ご斉唱ください。

なお、

3 番の最後

「信州大学
進み行け」は

繰り返しと
なります。

『信州大学歌』

♪

天空（そら）に切り立つ

アルプスの

光る白峰（しらみね）

希望に満ちて

理想も高く

今ここに

我等は示す

無限の叡智

ああ 誇らしく

自由の空へ

信州大学

羽ばたいて

♪

みどり育む

千曲川

清き生命（いのち）の

流れは永遠（とわ）に

あふれる想い

絶え間なく

我等は学び

世界に臨む

ああ 豊かなる

心を磨き

信州大学

輝いて

♪

深き歴史の

森を越え

時代（とき）を旅する

信濃の風よ

栄（は）えある文化

受け継いで

我等は拓く

遙かな未来

ああ 独創の

轍（わだち）を刻み

信州大学

進み行け

信州大学

進み行け



司会／

ありがとう
ございました。

■閉式のことば■

司会／

以上をもちまして、

令和7年度

信州大学
松本地区

卒業式・
学位記
授与式を

終了いたします。

一同
礼。

ご着席
ください。

『蛍の光』



(交響楽団演奏)

場内アナウンス／

壇上の
皆様、

どうぞ
ご退席ください。

ここで
会場の
皆さまに

お知らせが

あります。

お配りした
式次第に

掲載
されている、

ライブ
配信用の

二次元コードに
誤りがあり、

動画に
接続できない

状態と
なっています。

後ほど
動画を

ご覧に
なる場合は、

本学
ホームページの

『卒業式の
お知らせ
ページ』から

ご視聴

ください。

また、
駐車場について
お知らせ
します。

総合体育館
南側の
駐車場は

12:00 に
施錠いたします。

ご利用の
方は、

12:00 までに

お車の
ご移動を
お願いします。

臨時駐車場を
ご利用の
方は、

16:00 までに

お車の
ご移動を
お願いします。

最後に
なりますが、

卒業式
AR 看板の
日付は、

学位記の
日付に
合わせて

3月20日と

なって
おります。

それでは

1階席の
皆様、

お忘れ物の
ないよう、

ご退場
ください。

2階席
および

中継会場の
皆様は、

お席で
お待ち
ください。

2階席
および

中継会場の
皆様、

お待たせ
いたしました。

お忘れ物の
ないよう、

ご退場
ください。

(これにて
文字入力による

情報保障を
終了いたします。)